

京極読書新聞

<第28号>

発行日 平成23年 11月 1日(火)
京極町生涯学習センター湧学館

小説「春蘭」をめぐるバスの旅

湧学館司書 新谷 保人（あらや・やすひと）

今年の「バスの旅」は、小樽！でも、寿司やガラスの小樽とは、ちょっとひと味ちがいます。京極町出身の作家・峯崎ひさみさんの小説「春蘭」に描かれた小樽の街を旅してきました。



▲小樽運河にて



京極読書新聞は
毎月1日発行です。

小樽運河にほど近い伯父の家に下宿をした時期があった。生まれ育った開拓村の中学を出て、市内にある簿記の学校に通うためだった。
(中略)
伯母は、銭函という、小樽とは浜続きになっている漁村の出身で、美空ひばりの歌と魚の煮付けが上手い、大柄でよく笑う人だった。歌声がやかましいと、伯父が癪癪を起す。伯母は短い首をすくめ、少しの間、黙るが、じきにまた歌い出した。夫婦の間に子供はなく、伯母の方が一つ、二つ歳が上だと聞いていた。

(峯崎ひさみ「春蘭」)

1. 小樽運河

今回の参加者は16名。小樽運河に到着です。くもり空でしたが、天気予報で言っていた雨は降り出していないようなので、バスを降りて、運河沿いを歩いてみました。観光客で賑わう前の、静かな朝の運河。気分は上々です。



2. 旧小樽美容理容専門学校～旧繊維街

そして、小樽観光つばかったのはここまで。運河を離れたバスは旧小樽美容理容専門学校に向かいます。峯崎さんが学ばれた美容学校はすでに札幌に移転し建物も残っていませんが、同種の美容学校が旧繊維街にひとつ残っていたので、お願いして校舎の中に入れてもらいました。休日なのに、このツアーのためにシャッターを開け、中を案内してくれた後志美容理容連盟の皆様には深く御礼申し上げます。

「四月、まだたっぷり雪の残る錦を発ち、小樽駅に降り立った日のことははっきりと覚えています。初めて見た都会の景色。初めて嗅いだ町の匂い。衝撃でした。七年後に暮らすことになった東京より、小樽で受けたカルチャーショックの方が何倍も強烈でした。」そう、峯崎さんはおっしゃっています。

見学後、旧繊維街を散策。この時も雨はなく、秋の日差しさえ一瞬出てくる展開にはこちらの方がびっくりしてしまいました。

3. 住吉神社

もしかしたら今日はツイているのでは…と思い始めたのは、この住吉神社のあたりから。ちょうど、神社の秋季大祭(秋まつり)の日にぶつかったのです。御輿が出て、縁日の屋台が出て、まるで小説「春蘭」そのもの。バスの中から「春蘭売ってる口紅の女の店もあるんじゃないの」との歓声もあがりました。境内では、五穀豊穡を祈った「稲玉守り」も配られていました。



日本最北端(?)の芭蕉句碑

住吉神社境内にあった松尾芭蕉の句碑。碑文は「梅ヶ香にのつと日の出る山路かな」。明治二十二年(一八八九)の建立だそうです。古くから神社境内にあったものですが、戦時中「時局にそぐわない」と撤去されそうになったものを、隣りの家の人がこれを自分の庭に移して守りぬきました。庭に置いていた頃、その方は、そばに梅の木を植え、昔をしのんでいたそうです。

なお、神社の芭蕉句碑隣の碑は、平成5年建立の川柳作家・田中五呂八(たなかごろはち)の句碑でした。「人間を掴(つか)めば風が手にのこり」と刻まれています。



4. 海陽亭

小樽に住んでいる人にとっても「海陽亭」は遠い存在です。「伊藤博文」や「日露国境画定会議祝宴」といった言葉といっしょに登場する、もはや歴史的な名詞といったら言い過ぎでしょうか。岡田嘉子の親子や、石原裕次郎の親子がよくここで遊んでいたなどという逸話が「最近のこと」に感じるくらい、それほど古い由緒ある料亭なのです。まさか今でも現役でお店をやっているとは思ひもよみませんでした。

食事の前に、邸内を一周。祝宴の「明石の間」はもちろん、邸内のいたるところに配置されたお宝の数々に一同度肝を抜か

れました。まさしく伊藤博文がここにいた…と実感する風格です。

また、案内してくれた佐々木ツヤさんのお姿も私たちの印象に残りました。聞けば、大正のお生まれとのこと。キリッと着物を着こなし、滑舌よく部屋から部屋へ案内をつづけるお姿には、なにか、私たちも励まされるものがありました。峯崎さんのお友だちでもある小樽の作家・蜂谷涼さんに、この「海陽亭」を舞台にした「煌浪の岸」という作品がありますが、その小説の登場人物たちが目の前に抜け出してきたかのような錯覚におちいります。



5. 「北の誉」酒泉館～南樽市場

酒泉館でも、ツイていたというか。ちょうどこの時、二つの団体見学が重なってしまったのだそうです。私たちの方が二、三分早く酒泉館に入ったので、私たちから見学はスタート。案内してくれた村井俊司さんの名調子に乗せられ楽しく酒蔵をまわりました。自分の仕事に誇りを持って生きている人の言葉は気持ちがよいですね。

待たされることもなく、時間を無駄につぶされることもなく、事がテキパキ運ぶというのが今回のバスの旅の感想です。旧織

維街から南樽市場までの展開がうまく運んだことにより、帰り道の松浦武四郎ロードの余裕も生まれました。

南樽市場。「春蘭」に描かれた、あの伯母が今でも店先にとび出してきそうな賑わいです。旨い酒も酒の肴も手に入れて、酒泉館～南樽市場のワンツー・フィニッシュに気をよくして、バスは京極への帰路に入ります。

松浦武四郎ロード（国道五号線）

後志には、松浦武四郎関係の歌碑が三基。

○ 稲穂トンネル・仁木町側

岩を切 / 木を伐 / 草を刈そけて /
みちひらけし / 山のとかけも

この碑のそばには「まつらの滝」という小さな滝が流れています。「まつら」です。仁木町の人は賢いなあ…と感じるのは、こういうところ。きちんと「松浦」の読みを「まつら」と表記してある。



○ 倶知安町のある民間会社の敷地内

あやうしと / しりべつ川の / 白波を / 命にかけて / けふわたりけり



○ 京極町・京極温泉内

天津風 / 胡砂吹き払え / しりべしの /
千代降る雪に / 照る日影見む

後志ではありませんが、虻田郡洞爺湖町には、洞爺湖へ降りてゆく道に「武四郎坂」の名がつけられた坂道があります。その他、昨年バスの旅でまわった岩内町郷土資料館には入口頭に「松浦武四郎…岩内に立つ」の大きな絵が掲げられています。きちんと道案内をするアイヌの人たちを描きこんでいるところがエライ！



わかは、ちょうど北防波堤の築造が始まった年に、数え七つで子守奉公に出た。立岩にぶつかっては白く砕け散る波を眺めたくて、ある日の一人娘を背中であやしめながら、よくこの通りまで歩いて来たものだ。あれから十七年あまり、

(蜂谷涼「煌浪の岸」より)

峯崎ひさみさんは昭和22年の樺太・豊原生まれ。翌年、ほぼ最終に近い引揚船で、この京極の地にたどりつきました。昭和37年3月の錦中学校卒業。小樽の美容学校での一年間を経て、東京オリンピック後の高度成長に湧く東京へ移られます。

今年のバスの旅は、期せずして、樺太が始まり、樺太が終わるまでのバスの旅ともなりました。海陽亭の祝宴で始まった樺太が作家・峯崎ひさみさんを生み、そして、私たちが今、その峯崎さんの作品を京極の地で読んでいることに、とても感慨深いものを感じます。

【お詫び】前回の「後志シネマ散歩」で、海陽亭・明石の間のセットを、テレビドラマ「海は甦える」で使われた装飾と書きましたが、石原慎太郎原作のテレビドラマ「弟」のまちがいでした。お詫びして訂正します。

発行

京極町生涯学習センター湧学館
〒044-0101 京極町字京極158番地1
TEL 0136-42-2700(代表)
FAX 0136-42-2032
E-Mail yugakukan@town-kyogoku.jp



ホームページもご覧ください
<http://lib-kyogoku.cubet.com/>

